

# エゾシカを「地域資源」に 有効活用を目指す研究と教育

東京農業大学生物産業学部 教授 増子孝義

現在、北海道全域に生息する野生エゾシカ頭数は30万頭とも50万頭とも言われる。甚大な農作物被害などをもたらすことから、有害駆除が進められてきたが、顕著な効果は挙がらない。そこで、むしろ有効な「地域資源」として活用する方策が求められている。マイナスからプラスへの逆転の発想である。エゾシカ研究で道内屈指の蓄積を持つ本学オホーツクキャンパス（生物産業学部）の取り組み「エゾシカによる環境共生と地域産業との連携」は、文科省支援の現代GPに採択され、平成20年度から本格的に動き出している。

## 北海道開拓時代のエゾシカ

北海道のエゾシカは、古来より生息している動物の一つで、単に「エゾ」シカという北海道固有の品種のみならず、まさに「シンボリック」な存在の動物と言っても過言ではない。当然、アイヌ民族の生活において、肉を始めとする皮や腱などを食糧や衣類などに加工し、その生命を余すことなく生活の中に取り入れてきた。

さらに、明治時代に入ってから、黒田清隆やケプロン他、北海道近代化に重要な役割を果たした人物から注目され、鹿肉の缶詰などの加工品を生産するとともに、角（堅角）や皮を中国などに輸出していた。また、エゾシカは、狩猟に関する法律の整備においてその中心的存在であった。地域の住民からは身近な動物と位置づけられていたのである。

## 北海道経済に負の影響

しかし、近年においては、一部の狩猟者（ハンター）によるゲーム的なハンティングが伝統的に行われてきたものの、個体数は増加する一方で、耕地へと餌場を求めて下りてきて、農作物への被害をもたらす、いわば「厄介者」となっている。耕地における農作物被害や山林における樹皮被害、交通事故など経済に大きな負の影響をもたらされた。北海道全体で見ると農作物への被害額は、平成19年度で年間32億円に達した。

そのため、北海道庁ではエゾシカの有害駆除を促進してきたが、なかなか顕著な効果が挙げられずにいた。欧州では鹿をハンティングする歴史があり、鹿肉はジビエ料理として著名である。日本と欧州との文化の違いはあれ、果たして「エゾシカ＝害獣」とみなしているのだろうか？ そこで、平成17年度より北海道庁が

ますこ たかよし  
1951年北海道生まれ。  
帯広畜産大大学院修士課程  
修了。東京農大生物産業学  
部生物生産学科（動物生産  
管理学研究室）教授。  
専門分野：動物栄養学。主  
な研究テーマ：採食量お  
よび栄養価による添加物利  
用サイレージ評価。主な著  
書：『新版 特用畜産ハン  
ドブッカー鹿編一』『乳牛管  
理の基礎と応用2006年改訂  
版』



中心となってエゾシカ有効活用を推進してきた。

特に、オホーツクキャンパスのある網走市を始めとした北海道東部には、世界自然遺産知床や阿寒国立公園などわが国を代表する風光明媚な地域があり、非常に多くのエゾシカが生息している。こうした背景の中で、本キャンパスの現代GPの取り組み、いわば「エゾシカ学」は始まった。

## 「生態→加工→流通」を学ぶ

オホーツクキャンパスは、生物生産、食品科学、アクアバイオ、産業経営の4つの学科を有している。すなわち動植物の生態や管理、地域資源の加工、流通や企業といった内容を学習する既存のカリキュラムがある。それらを参考に「エゾシカ学」を一教育プログラムとして学科の枠を外し学科横断的に開設することによって、文系・理系の学科を問わず、エゾシカの「生態→資源としての加工→流通」までの一連の流れを学ぶことができるようにした。

平成20年度に本格的に始動した「エゾシカ学」は多数の学生に網走市民を交えて、基礎課程1、2、応用課程1、2のプログラムが順調に進行した。規定のプログラム終了者に与える「エゾシカ学専門士」の称号を初めて4年生数名に授与した。平成21年度には多数の「エゾシカ学専門士」が誕生することとなる。

「エゾシカ学」は、このように学生や市民に対する教育プログラムとして座学と実習を実施するだけでなく、それと併行してワークショップを開催しており、エゾシカの有効利用（肉、角、皮）、エゾシカ肉を用い